

お金の重み

滋賀県・近江兄弟社中学校 1年 一円 泰平

ぼくの名前は「一円」という姓です。幼稚園や小学校の時はこの名前のせいで、「一円玉」とか「たったの一円」とよくからかわれました。ぼくの父やおばさん達も、この名前のことで、よくいじめられたそうです。ぼくも、はっきり言うと、この名前は迷惑というかいやでした。「名前はイチエンです。」と言うと「どんな字を書きますか?」と必ず聞かれます。「一円、二円の一円です。」と説明する時が特にいやです。そういう時、「どうして日本のお金の単位は円なんだろう?」とよく思います。この作文を書くことに決めて、この「円」という単位のことを調べてみることにしました。最初にぼくの住んでいる彦根にある独立行政法人国立印刷局という所に電話をしてたずねてみることにしました。昨年、見学に行った時のパンフレットが残っていたので、電話番号もすぐ分かりました。きんちょうして電話をすると、「ここではちょっと正しいことが教えてあげられないので、大阪の造幣局の広報課に聞いてください。」と言われました。大阪の造幣局では、「円の由来ですね。」と言われ、「由来」の意味が分からなかったけど、「はい。」と言ってしまいました。今のお金の単位が「円」に決められたのは、明治4年の「新貨条例」だそうです。なぜ「円」になったかには二つの説があって、一つは形が丸くて円形だったから。もう一つは中国のホンコンの銀貨に「円」というのがあって、それをまねたという説だそうです。それなら「丸」とか「玉」とか「球」とかにしてほしかったと思いました。「円」に決められたのは、不幸なことでした。祖父に聞いた話では、ぼくの名前の「一円」は祖先が住んでいた所の地名が「一円」だったそうです。この村の多くの人が「一円」という名前だそうです。結局、お金の「一円」とは何の関係もないのだけど、この名前のせいで、ぼくはお金に対して、他の人とはちがう気持ちを持っているように思います。

前にも書きましたが、昨年の夏休み、子供会の夏のレクリエーションで、国立印刷局彦根工場の見学をしました。厳重な警備で、名前とか年齢とかいろいろなことを前もって用紙に書いて提出し、やっと見学できるのですが、ぼく達の車が入る時、鉄のさくが地下に下がり、入り終わると上がってきて「スゲー」と思いました。でも、中に入ってその理由が分かりました。彦根工場では、主にお札を印刷しているのです。一万円札の絵がいくつも1枚の大き

な紙に印刷されて、バンバン出てきて「お一億やー」と誰かがさげんでいました。五千円札も千円札もいっぱい印刷されて出てくるのですが、なんだかぼくにはお金という感じはしませんでした。ただの一万円札の絵の紙というかおもちゃのようでした。見学の後、別の部屋で説明を聞きました。ここでは、国公立大のセンター試験を印刷する年もあるそうです。その後、「1億円のかたまり」を持たせてもらって、軽くはないけど意外と持てたのにびっくりしました。その1億円は、番号が印刷されてないので使えないそうです。この1億円のように、ここのお金はなぜかお金という感じがしませんでした。センター試験の問題と同じように印刷物でした。

それはきっと、まだ人が使っていないからだと思いました。お金は、いろんな人がいろんな気持ちで使って、だんだんお金っぽくなっていくのではないかと思います。例えば、一生けん命働いてかせいだお金とか、病気の人に早く治ってほしいと思って渡す「お見舞い」とか、結婚する人にお祝いの気持ちで渡す「お祝い」とか、おそう式で悲しい気持ちで渡すお金とか、いろんな人がいろんな気持ちで使って、はじめてお金になっていくように思います。印刷局で見たお金には、人の気持ちがしみこんでなかったのも、お金の重みを感じなかったのだと思います。ぼくもこれから一生けん命働いて、かせいだお金をいろんな気持ちをこめて使いたいと思います。ぼくの名前の「一円」も、お金といっしょでいっぱい気持ちをこめて、重い「一円」にしたいと思います。